

てきすとぽい杯



『ロボットの見る夢』みお

『地下にひそむもの』しゃん@にゃん革

『第八話 封印の解れ』茶屋

『落ちた駕籠かき』志菜



目次

てきすとぼい杯について

[てきすとぼい杯について](#)

[第 16 回 募集要項](#)

[第 16 回 審査結果](#)

[入賞作品紹介](#)

《大賞》

[『ロボットの見る夢』](#) [みお](#) 獲得☆ 4.071

《入賞》

[『地下にひそむもの』](#) [しゃん@にゃん革](#) 獲得☆ 4.000

〈幻の連載巨編賞〉

[『第八話 封印の解れ』](#) [茶屋](#) 獲得☆ 3.923

[『落ちた駕籠かき』](#) [志菜](#) 獲得☆ 3.846

〈候補作品〉 ※得票順

[『スラップスティック』](#) [大沢愛](#) 獲得☆ 3.769

[『僕らの終点』](#) [晴海まどか](#) 獲得☆ 3.692

[『或いはそれが禍福という物の終着点だろうと君は言わなかった』](#) [犬子蓮木](#) 獲得☆ 3.583

[『春酔い』](#) [栗田柚香](#) 獲得☆ 3.583

〈山手線ワンダーツアー賞〉

[『ある男の盛り上がらない話』](#) [碓氷穰（元うわああ（ry）](#) 獲得☆ 3.583

[『お迎え』](#) [◆ BNSK.80yf2](#) 獲得☆ 3.500

[『終点と最初の作品について』](#) [太友 豪](#) 獲得☆ 3.286

〈来月ぼい杯もまた来てくれるかな！賞〉

[『ワンマン電車、居眠り経由初恋行き』](#) [碧](#) 獲得☆ 3.267

[『二日酔い』](#) [小伏史央](#) 獲得☆ 2.857

〈集計外作品〉 ※投稿順

『爆睡都市』 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.250 (制限時間後に編集)

『夜間歩行』 味の外 獲得☆ 3.000 (制限時間後に投稿)

『四角い切符』 三和すい 獲得☆ 3.462 (制限時間後に投稿)

『ボカロ』 姫翠@ワサラー団 (vip 店長&9 獲得☆ 1.500 (制限時間後に投稿／お題不足)

〈関連作品〉

[関連作品のご紹介](#)

終わりに

[終わりに](#)

[てきすとぼい広告](#)

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012 年 2 月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集う WEB 作家の有志で開発を進めております。

2013 年初頭に、ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、同年 1 月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぽい杯は、制限時間 1 時間＋推敲 15 分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第 16 回てきすとぽい杯

会 場 : <http://text-poi.net/vote/58/>

お 題 : 「お客さん、終点ですよ」

この言葉を、タイトルまたは本文で使用してください。

投稿期間 : 2014 年 4 月 5 日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2014 年 4 月 6 日 0:00 ~ 2014 年 4 月 13 日 24:00

投稿期間中の Twitter まとめ : <http://togetter.com/li/651671>

第 16 回は、てきすとばい杯初参加の作家さん 4 名を含む、計 17 作品をお寄せいただきました。

【投稿について】

投稿期間：

4 月 5 日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時刻になりましたら、会場やてきすとばい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/58/>

てきすとばい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

4 月 6 日（日）0 時 ～ 4 月 13 日（日）24 時

審査方法は☆5 段階評価で、てきすとばいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降 3 作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第 16 回審査結果

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1 位 ☆ 4.071

『ロボットの見る夢』 みお

<http://text-poi.net/vote/58/9/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:38 最終更新: 2014.04.05 23:43

総文字数 : 2596 字

2 位 ☆ 4.000

『地下にひそむもの』 しゃん@にゃん革

<http://text-poi.net/vote/58/11/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:43 最終更新: 2014.04.05 23:44

総文字数 : 2355 字

3 位 ☆ 3.923

『第八話 封印の解れ』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/58/8/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:37

総文字数 : 2362 字

4 位 ☆ 3.846

『落ちた駕籠かき』 志菜

<http://text-poi.net/vote/58/13/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:44

総文字数 : 1429 字

5 位 ☆ 3.769

『スラップスティック』 大沢愛

<http://text-poi.net/vote/58/14/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:44

総文字数 : 2699 字

6 位 ☆ 3.692

『僕らの終点』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/58/10/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:41 最終更新: 2014.04.05 23:45

総文字数：4354 字

7 位 ☆ 3.583

『或いはそれが禍福という物の終着点だろうと君は言わなかった』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/58/4/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:28

総文字数：2228 字

7 位 ☆ 3.583

『春酔い』 栗田柚香

<http://text-poi.net/vote/58/5/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:28 最終更新: 2014.04.05 23:31

総文字数：2307 字

7 位 ☆ 3.583

『ある男の盛り上がらない話』 碓氷穰（元うわああ（ry）

<http://text-poi.net/vote/58/6/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:35

総文字数：1849 字

10 位 ☆ 3.500

『お迎え』 ◆ BNSK.80yf2

<http://text-poi.net/vote/58/2/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:18 最終更新: 2014.04.05 23:18

総文字数：1064 字

（集計外） ☆ 3.462

『四角い切符』 三和すい

<http://text-poi.net/vote/58/16/>

投稿時刻: 2014.04.06 00:26

総文字数：907 字

11 位 ☆ 3.286

『終点と最初の作品について』 太友 豪

<http://text-poi.net/vote/58/12/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:44

総文字数：953 字

12 位 ☆ 3.267

『ワンマン電車、居眠り経由初恋行き』 碧

<http://text-poi.net/vote/58/3/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:19 最終更新: 2014.04.05 23:24

総文字数 : 2074 字

(集計外) ☆ 3.250

『爆睡都市』 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/58/7/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:35 最終更新: 2014.04.10 02:57

総文字数 : 2785 字

(集計外) ☆ 3.000

『夜間歩行』 味の外

<http://text-poi.net/vote/58/15/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:56

総文字数 : 1494 字

13 位 ☆ 2.857

『二日酔い』 小伏史央

<http://text-poi.net/vote/58/1/>

投稿時刻: 2014.04.05 23:11 最終更新: 2014.04.05 23:40

総文字数 : 338 字

(集計外) ☆ 1.500

『ボカロ』 姫翠@ワサラー団 (vip 店長&9

<http://text-poi.net/vote/58/17/>

投稿時刻: 2014.04.12 02:04

総文字数 : 19 字

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/58/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 4.071

『ロボットの見る夢』

<http://text-poi.net/vote/58/9/>

著：みお

市営電車の職員の制服をまとい、乗客一人ひとりに、終点を案内するロボット。
「オキヤクサマ、アシモト、オキヲツケテ」
――旧式の、壊れかけの、この一体だけ時間に取り残されたようなロボットが見届けた、
駅と電車と乗客たちのいる風景を静かに描いた物語。
第 15 回大賞作品に引き続き、てきすとぽい杯 3 人目の連覇達成となりました！

《入賞 3 作品》

獲得☆ 4.000

『地下にひそむもの』

<http://text-poi.net/vote/58/11/>

著：しゃん@にゃん革

新宿から電車で 20 分、築 30 年の一階角部屋 1 D K、家賃 5 万円台。
俺が 20 年近くも住み続けたこの部屋には、ある秘密があった。
電球が切れない、家電製品が壊れない……そして恐らく、住人である俺にも何かが？
ある日、耐え切れなくなって部屋の地下を掘り返すと、そこには――。
丹念に描かれた不思議なアパートでの生活と、まさかの結末が、高い評価を獲得しました。

獲得☆ 3.923

『第八話 封印の解れ』

<http://text-poi.net/vote/58/8/>

著：茶屋

異世界からやってきた少女・クルゥブニーカに、彼女の世界を救うよう懇願され
異界の門をくぐった宗太郎。しかし門の先に広がっていたのはまた別の世界だった。

「別世界の魔王」の能力を顕現させ、隠された門を目指す宗太郎たちは――
……………という物語の、第八話。幻の1～7話・9話～終章が完成する日は来るのか？
疾風怒濤の連載巨編“風”ライトノベル、前話までのあらすじと共に、お楽しみください。

獲得☆ 3.846

『落ちた駕籠かき』

<http://text-poi.net/vote/58/13/>

著：志菜

ここは、宿場と宿場を繋ぐ街道沿いの山中。
ぶらりと歩く浪人者がひとり、何やら諍う声に足を止めると、木々の影に、
四手駕籠の客を強請ろうとする駕籠かきの姿があった。
刀を門に挿し直し、浪人は彼らに声をかけるが、駕籠かき達は見ることすらに屈強で……？
切った張ったのアクションシーンも見所の、本格時代小説です。

《特別賞》

《幻の連載巨編賞》

『第八話 封印の解れ』

<http://text-poi.net/vote/58/8/>

著：茶屋

連載中の長編小説、という体裁をとった、即興小説でありながら広大なスケール感を
感じられる作品でした。第16回入賞とのダブル受賞となります！

《山手線ワンダーツアー賞》

『ある男の盛り上がらない話』

<http://text-poi.net/vote/58/6/>

著：碓氷穰（元うわああ（ry）

山手線の全29駅周回と、主人公の思考がシンクロした、表現の可能性に挑戦するような作品でした。

《来月ぽい杯もまた来てくれるかな！賞》

『ワンマン電車、居眠り経由初恋行き』

<http://text-poi.net/vote/54/9/>

著：碧

有名美容家のあの人、ギネス世界記録番組のあの人、惜しくも先日亡くなった俳優のあの人などが次々と登場する、時事的な話題を物語に巧みに折り込んだ、旬な作品でした。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

（次のページから、作品が始まります。）

投稿時刻 : 2014.04.05 23:38

最終更新 : 2014.04.05 23:43

総文字数 : 2596 字

獲得☆ 4.071

《大賞受賞作品》
ロボットの見る夢
みお

高層ビルが建ち並ぶ町に茜色の夕闇が広がり、熟柿のような太陽が西の地平線に沈んでいく。道进行る車のヘッドライトが闇を切り裂く頃、彼はようやく目を覚ました。

「オキヤクサマ」

固い関節、重い頭、たどたどしい滑舌。

それでも市営電車の社員を現す深緑色の制服を着こなして、彼はよろめきながら電車の中を闊歩する。

「オキヤクサマ、シュウテンデス」

車内はすっかり真っ暗闇。電源は全て落ちた。隙間から、寒の戻りの冷たい風が吹く……いや、吹いている。彼の身体に備えられた、温度計がそれを示している。人間にとって、この気温は酷く寒いはずだった。

「オキヤクサマ、シュウテン」

「これだからポンコツは」

コツン、と何かが彼の頭を叩いた。彼はミシミシと、金属の音を立てて振り返る。そこに、赤い顔をした男が立っている。

「オキヤクサマ、アシモト、オキヲツケテ」

「おいおい、生意気にもアルコール検知付きか。このポンコツ」

「やめなよ、ロボットをからかうのは」

「電車で客を起こすロボットねえ……昔は沢山いたもんだが、まだあったのか。この路線、いよいよヤバイな。どこの会社も、もうこんなのもいねえよ。今じゃ、もっと高性能だ。アナログなんだよ、ここはさ」

男は酷く酔っている。彼は首を傾げる。この時間、電気の落ちた車内に人が居ては危険なのだ。どんな事故に繋がるかも分からない。

だから、彼はお客様を無事に帰す義務があった。

「オキヤクサマ、シュウテン」

「わあってるよ」

吐き捨てて、男は彼の頭を傘で殴り付ける。彼はよろめくも、倒れることはなかった。重心がしっかりと作られているのだ。しかし、頭に付けられたライトが赤く、青く、黄色く点滅した。

「やめなよ、壊れたら弁償だぜ。こんなのも高いんだ」

「俺は腹がたつんだ。こんなロボットのせいで、俺等の若い頃はさんざ苦労した。ロボットに仕事取られてよ。まあ、その頃のロボットもこうして用済みになって、いまじゃこのザマさ。人間様の苦労をちったあ思い知れっての」

ががが、と男は笑う。さんざん小突いて満足したのか、非常口の扉を押し上げて男たちの姿は闇へと吸い込まれた。

「マタノ」

彼は小突かれた格好のまま、闇に向かって頭を下げた。

「マタノ、ゴリヨウヲ、オマチシテオリマス」

人の熱を感知する熱源サーチがぴこぽこ音を立てて動く。誰もいない。この電車には誰もいない。今夜の彼の仕事は、終わった。

深々と頭を下げたまま、彼は唐突にフリーズした。最近、こんな事が多い。充電がうまくできないのだ。充電器に向かって自動走行を始めるが、その間も幾度も警告アラームが鳴り響く。

彼の身体が悲鳴をあげた。生身の肉体などありはしないが。鉄でできた身体が、電気でできた血管が、幾度も震えて闇の中で散々に音を立てた。

苦しみなど覚えるはずもない。疲れなど、知るはずもない。しかしその身体は確かに悲鳴を上げている。

彼の身体から狂ったように、声が飛び出す。

「オキヤクサマ」

「オキヤクサマ、シュウデン」

「シュウデン、マタノゴリヨウ」

「ゴリヨウ」

「お客さん、終点ですよ」

ふと、声が聞こえた。

皺を帯びた手が彼の身体に伸ばされて、背に隠された小さなボタンを押す。それは、彼を作った人間だけが知る秘密のボタンである。

暴走を始めた鉄の身体の中で、シュンと音がする。アラームの音が止まり、光が消えた。彼は久々に、身の軽さを知った。

「ほら、同じ言葉を、続けてみてごらんなさい」

ボタンを押した手が、離れる。その手を持つのは白髪の老人である。老人は、彼と同じ制服を着込んでいる。皺一つない、深緑の制服だ。胸には、赤いワッペンが輝いている。

老人は彼の前に腰を落とし、穏やかな笑顔を見せた。

「お客様、終点ですよ」

「オキヤクサマ、シュウテンデスヨ」

声はスムーズだ。言語エリアのメモリが、正常に動いている。あれほど回っていたファンも、もう動いていない。

老人は、彼の頭を優しく撫でた。

「そう、よくできました。あなたの言葉のおかげで、何人の人が救われるでしょう。目覚めて、誰も居ないのは寂しいですから」

「シュウテンデス……オキヲツケテ……」

「疲れて眠って、目が覚めて。誰もいなくても、あなたが隣にいれば、どれほど嬉しいでしょう。仕事の愚

痴に自慢話に、悩み事。色々聞くでしょう。そう、何十年も。聞いてきたでしょう、あなたは」
「キョウモイチニチ、オツカレサマデシタ」
「その物語を、私にも聞かせてください」

老人は彼の身体を充電器に近づけた。充電器はいつも車両の隅にある。彼がそこに近づけば、身体が自動的にセットされ、電力が供給されるはずである。

が、もう動けない。自動的に吸い寄せられない。彼は知っていた。充電器と繋がるための、ケーブルが焼き切れている。充電器から流れる甘露な電力は、もう二度と彼の身体を潤さない。

老人の目が寂しげに潤み、嬉しそうに円を描き、やがて憐れむように諭すように閉じられた。
「ね。もう、あなたも終点です」

「シュウテン」

「ええ、終点です。私が遠い昔に終点を迎えたように」

「シュウ……」

「かつてあなたが私に、人生の終点を教えてくれたように。私もあなたに伝えにきたのです」

老人は彼の焦げたコードを巻き取って、断ち斬った。

「いきましょう。終点ですよ」

古びた車両の扉が開く。そこは、終点の駅であった。しかしその向こうに、光があった。

翌朝のことである。

「終点ロボットが壊れたってよ」

深緑色の制服を着た男達が、ひそひそと囁いてる。その声は、時に大胆に大きくなり、すっかり囁きではなくなっていた。

「ああ……あれな。あのロボット作ったのが、大昔の車掌で」

「そうそう。かわりものの、理系の車掌な。朝に社内で死んでたっていう……」

「その死体の横で、終点です。終点です。っていったんだろ、あのロボット」

「不気味だよなあ。何ですぐ廃棄しなかったんだか」

「金がなかったからなあ、うちの会社……」

こらあ、と間の抜けた声が響く。その声を聞いて、囁いていた男達は慌てて背を伸ばした。朝礼だ。終点である車庫に収まった電車の群れを背景に、またいつもの朝礼がはじまるのである。

古びたロボットが壊れた話題はほんの一言二言で伝え終わり、続けて無事故キャンペーンの話がはじまる。

欠伸を噛み殺す若者たちの列の向こう、朝日を浴びた車両だけが妙に明るく光って見えた。

あと数分後。この終点から、今日も電車は滑り出していく。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:43

最終更新 : 2014.04.05 23:44

総文字数 : 2355 字

獲得☆ 4.000

《入賞作品》
地下にひそむもの
しゃん@にゃん革

新宿まで電車で二十分、駅から徒歩八分。

そこそこ交通の便に優れたその街に住んで二十年近くになる。

半径百メートル以内にコンビニが三軒、しかし入居しているアパートは文化財寸前だ。引っ越した時点で築十年だったから、今は三十年を迎えようとしている。廊下の壁にはひびが入っているし、セキュリティなんてものは望むべくもない。実際、俺は空き巣に二度入られた。向かい居酒屋だから夜遅くまで酔っぱらいが騒いでいるし、うっかりすると部屋の前で絡まれることもある。まともな神経だったら、一週間ももたない。かと言って、俺が異常な神経かということ、それはまた別の問題だ。

いくつかの利便性と、耐えがたい不自由さ。俺の住むアパートをレーダーチャートで表現したら、きつといびつな形になるだろう。気になる家賃は、一階角部屋の1DKで5万円台だから、可もなく不可もない。年齢のわりに低収入な俺には妥当とも言える。けれども、それくらいの家賃だったら、快適な部屋はほかにもあるにちがいない。そう、俺は好んで二十年近くも同じ部屋に住みつづけているのだ。何故なら、ここには空き巣被害や深夜の騒音など笑って許せるくらいのメリットがあるからだ。

そのことに気づいたのは、入居五年目ほどのことだっただろうか。年の瀬に大掃除をする際、俺はふとトイレの電球を手にとった。首を傾げたのは、電球がすっかり黒ずんでいたからではない。この電球は、一体いつ交換したのだろう。そんな疑問が突如、俺の頭に浮かんだのだ。

トイレの電球だけではない。部屋の蛍光灯、家電製品、あらゆる日用品。いわゆる消耗品の類を除けば、この部屋に来てからというもの、寿命が尽きたものが一つもなかったのだ。

断っておくが、俺はごくふつうの日常生活を営んでいる。月曜から金曜まではケツの穴の中にいるような会社で働き、週末は家でゲームをしたり、映画を観ている。人と変わったところは何もない。つまり五年も経てば、蛍光灯が切れたり、電子レンジが壊れたりして当然なはずなのだ。

地デジ化に伴いテレビは買い替えたが、冷蔵庫や洗濯機も新品と変わらない働きをしてくれる。なによりも、とっておきがほかにある。それが何だか、分かるかい？ まあ、すでに予想がついているだろうが、念のため言っておこう。俺は、おそらく歳を取っていない。この部屋にはきっと劣化を防ぐ特別な力があ

り、それは人体にまで影響を及ぼしているのだ。

その証拠に、とうに 40 を過ぎている俺は、未だに学生と間違われる。肌は弾力に富み、高校生の甥と歩けば兄弟に見られるほどだ。陸上部員だったおかげで、その気になれば 100 メートルを 11 秒台で走ることだってできる。肉体は、この部屋に入居した 20 代の頃のままなのだ。

しかし、そんな異常な年月を重ねた結果、皮肉なことに俺の精神は蝕まれることとなった。

普通ということのありがた味。これは普通ではなくなった時になってはじめて分かる。

永遠に若い俺は老けメイクをして会社に出勤し、同年代の同僚たちの成人病の話にも耳を傾けなければならない。

肉体が老いていない、そのことが世間に知れ渡れば少々厄介なことにもなるだろう。俺は拉致され、非合法な連中に徹底的に調べられるかもしれない。おそらくは奴らはひどい勘違いをして、俺の細胞や血液に老化防止の鍵が隠されていると思うだろう。

そのようなことを考えているうちに、俺は常に得体の知れない恐怖を抱え込むこととなった。時折、動悸が早まり、めまいを起こすことがある。そこから解放されるには部屋を移るしかない。だが、それは無理だ。あまりに失うものが大きすぎる。

そしてついに気が狂いそうになったある夜、俺は単なる思い付きで床を掘ることにした。

それはこの部屋の秘密が地下にあると睨んだのかもしれないし、あるいは隠し通路を作ろうとしたのかもしれない。とにかく俺は床に穴を開け、スコップで地面を掘った。

やがて目にしたのは、一本の線路とトロッコ列車だった。

突然そんなものが現れ、俺は呆気にとられたが、トロッコ列車には車掌姿の男が一人乗っていた。「ああ、ついにここを発見しましたね。長い間、お待ちしていました」

丁寧にお辞儀をする車掌は、トロッコの後部に取り付けられた大ぶりのレバーを握っていた。「待っていた？ 俺を？」

「はい、そうですとも。この先には、本当の大家さまが住んでいらっしゃいます。大家さまは大変慈悲深く、そして控え目な方故、貴方さまに肝心なことをお伝えしておりませんでした。しかし、ゆくゆくは自らお気づきになられるだろうと期待されていたのです」

「期待？ 話がまったく見えないが、この線路は何なんだ？」

俺が訊ねると、車掌は破顔した。よくぞ訊いてくれた、そう言いたげだ。

「はい。これぞ劣化防止の秘密です。大家さまは、毎晩この線路でここへ来て、あなたの部屋に神秘のパワーを送っていたのです」

「神秘の……パ、ワー？」

「大家さまは、不老長寿のお方です。一部では人魚の肉を食べたと言われています。さらに無駄話をさせたら世界一。ご自身の力を持て余し、ご入居者さまにその力を分けていたのです」

面倒だから割愛するが、その後も車掌は一人で喋りつづけた。俺はその暴力的な話術に翻弄され、トロッコに乗った。

そして進むこと数十分、トロッコは徐々に速度を落としていった。

「お客さん、終点ですよ」

やや茶目っ気を帯びた口調で車掌は告げると、行き止まりにあるドアを指差した。

「さあ、あれが不老長寿である大家さまのお部屋です」

それを目にした瞬間、俺はすべてを理解した。

どうして俺が歳を取らないのか。大家が何者なのか。

ドアにプレートが埋め込まれ、こう書かれていた。

徹子の部屋。

呆然とする俺の横で、車掌が相変わらず何をどうでもいいことを喋りまくっていた。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:37

総文字数 : 2362 字

獲得☆ 3.923

《入賞作品》

《特別賞・幻の連載巨編賞》

第八話 封印の解れ

茶屋

前回までのあらすじ

突如異世界からやってきた少女・クルubbニーカと出会った平凡な高校生・宗太郎はいろいろとすったもんだの末、彼女の世界を救うために異世界へ向かうことを決意する。だが、異界の門を超えやってきた場所はクルubbニーカの世界とは異なるものだった。改めてクルubbニーカの世界へ向かおうとするも、謎の刺客に襲われ異界の門を破壊されてしまう。刺客たちの攻撃を切り抜け、たどり着いた街で宗太郎たちはその世界が巨大企業同士が覇権をかけて争っている世界であるということを知る。別の世界へ渡るための門は巨大企業が独占しており、それを奪い合う小競り合いに巻き込まれてしまったのだ。しかも彼らはこの世界にはない魔術を使うことのできるクルubbニーカを貴重なサンプルとして狙い始める。再び襲撃を受け、危機に瀕する宗太郎たち。だが、そこへ別の組織がやってきて宗太郎たちを救う。彼らはスヴァルトアールヴヘイム商店街振興組合という反巨大企業体のレジスタンスたちであった。彼らはレジスタンスたちへの協力を見返りに、巨大企業に管理されていない異界の門を教えるという。そして、彼らについて戦いの場へと立たされることとなった宗太郎とクルubbニーカ。巨大企業体バルドルへの奇襲作戦が成功するかに見えたその時、増援が現れ、退路を絶たれてしまう。次々と倒れていく仲間たち、もはや絶望的な状況と思われた。しかしその時、宗太郎は新たな力「別世界の魔王」の能力を顕現させる。

軍勢がいる。全て、手足のように操れる、我が軍勢。

「全てを支配する。全てを塗り替える」

果たしてそうだったか。我が望みは。

「無に帰す。絶望も悲しみも愛も希望もすべて飲み込んで」

宿敵が前にいる。配下は皆死に絶えた。だが何故か、妙な安心感を覚えていた。
「魔王、もう終わりだ」

銃弾すら受け付けなかった強化外骨格社員が巨大な力に圧迫されるかのようながいつも簡単にひしゃげた。ベキゴキゴリという鈍い音とともに断末魔の叫び声が聞こえ、やがて水音がしたかと思うと、圧縮された社員が球状の塊となって地に落ち、さらに収縮を続けている。

「なんだこれ」

宗太郎はそれが自分のやったことだとは信じられなかった。
けれども、感触があった。自分の中にある巨大な力で邪魔な存在を押し潰したという感触を。
力を使った瞬間、奇妙な光景が目の前に浮かび、自分が知らない自分の中の誰かの感情が流れ出してきた。
昂る心、冷徹な意思、もの悲しげな無常観。
混乱する。
混乱の中で、宗太郎は力をふるい続ける。
暴力を、圧倒的な、魔王の力を。

――第八話 封印の解れ――

目を開ける。天井が見える。すぐそばの窓からは日差しが差し込み、きれいな青空が広がっている。
「起きましたか。お客さん」

聞きなれた声だ。碧眼の少女の顔が覗き込んでいる。確か商店街振興組合の組合員でアールヴ、通称・薬屋だ。

異世界から来た宗太郎たちをいまだお客さんと呼ぶのはアールヴぐらいだ。
宗太郎はゆっくりと身を起こすと周囲を見渡した。ベッドがいくつもあり、包帯を巻いて寝ているものが何人もいる。

「病院？」

「仮のですがね。今回の戦いで傷を負ったものはたくさんいるんで、病院はもう一杯ってわけです。それ以上に一杯なのは」

そこまで言ってアールヴは口をつぐむ。
「そうだ。たくさん死んだ。傷を負った物以上に死者が多かったのだろう。」

「クルubbニーカは？」

「無事ですよ」

「良かった」

たくさん人が死んだのにそんな言葉を吐いていいのかわからなかった。けれども、彼女が死んでいたら自分はすべてを失ったような気がしていただろうと宗太郎は思う。何せ、この世界の人間じゃないのは宗太郎とクルubbニーカしかいないのだから。

「一体何があったんだ」

「俺もよくわからんですよ。あんたが急に不思議な力で社員どもをぶっ殺したんですから。すごかったですよ。ありやいったい何なんです？」

「俺も知らないんだ」

けれども、その力は使ってはいけない力のような気がした。

とてつもなくおぞましいものの力を何かと引き換えに使った。そんな感じがした。

「でも、なんだか黙示の終点ってやつみたいな力でしたね」

「何って？」

「お客さん、終点ですよ」

「終点ってのは」

「物ってのは圧縮するとどうなります？」

「潰れるな」

「全方向から同じだけの力をかけたら？」

「そのまま縮むんじゃないか？」

「そうですね。だけど、限界まで圧縮し続けたら、何になると思います」

「なんだ？」

「点ですよ。鈍いな一、お客さん。圧縮し続けると最終的に点になる。つまりは終点ってわけですよ」

終点、あの時強化外骨格正社員は最終的に点になったのか……。

「別世界の魔王ってのが使ってたっていう伝説がありますね」

「別世界の魔王……」

情景がフラッシュバックする。戦争、血、支配、力、敵、勇者、封印。

ふと、笑いがこぼれてきた。

何故だか、高揚感が沸き立ってくる。

久しく忘れていた感覚だ。

「どうしたんです」

「いや、もう少し教えてくれないか。商店街振興組合の戦力について」

「なんでまた急に。お客さんあれほど戦うことを嫌がってたじゃないですか」

「気が変わったんだ。力を手に入れたから」

気が元に戻ったんだ。力を取り戻したから。

自分の中にいる何かが、目を開けようとしている。

目覚めさせるために、力を振るわなければ。

彼らを呼び覚ますために。

「宗太郎」

声が聞こえて我に返る。クルubbニーカが入り口に立っていた。

何か奇妙なことを考えていたような気もするが、まだ混乱しているのかもしれない。

「なんだ生きてたのか。がっかり」

クルubbニーカが慌てたように言い足すのがなんだか可愛らしくて自然と笑みがこぼれてくる。

「お前の世界を救うまでは死ねないからな」

そう、まだ、死ぬわけにはいかない。

何故ならば、

我が戦いは始まったばかりなのだから。

一続 かない

投稿時刻 : 2014.04.05 23:44

総文字数 : 1429 字

獲得☆ 3.846

《入賞作品》
落ちた駕籠かき
志菜

羽織は羊羹色に色褪せ、落し差しにした刀の鞘は擦り切れている。足を引き摺るようにして、見るからに浪人といった風情の男が、山の中の街道をとぼとぼと歩いていた。

陽さえめったに差さぬような薄暗い山中である。山肌を覆う苔はしっとりと濡れて蒸せるような匂いを放っている。道の反対側は切り立った崖になっており、下からはわずかながらせせらぎの音が聞こえてくる。

男は足を止めた。

人の声が聞こえた。男の声で、怒鳴っているようである。

道の先はゆるりと左へ曲がっており、木々が邪魔になって見通しが悪くなっている。男は刀の柄袋を取り、門に挿し直した。右手で破れた笠の紐を解きながら慎重に足を進めると、やや開けた大木の根元に駕籠かきがいるのが見えた。四手駕籠は地面に下ろされており、中に老人が座っているのが見える。

駕籠かきの一人は、恫喝するような低い声で言った。

「お客さん、終点ですよ。何度言ったら分かるんですかねえ」

尻端折りをした上半身は裸であり、りゅうと盛り上がった筋肉を誇るように腕を回しながら言う。

中の老人は、怯えるような目で駕籠かきを見上げる。

「わ、わしは次の宿場まで、と頼んだはずや……」

それを聞いて、もう一人の駕籠かきも口を開いた。

「はあ、聞こえませんかあ？ 最近耳の通りが悪くてね。酒手をはずんでもろたらもうちょっとよく聞こえるかもしれませんね」

若く、きんきんとした声だ。さっき聞こえた声の主は、この男のものらしい。

浪人の男はゆっくりと歩いて行った。

「無体なことを申すでない」

突然現れた侍に、駕籠かきたちは驚いたように振り返った。

「な、なんでえ、てめえは」

高い声の男を制するように、上半身裸の方の男が、手を広げながら落ち着いた口調で言った。

「お目汚しをしてすみやせん。どうぞ、気にならずにお通りください」

相手が痩せた、みすばらしい侍だと侮るような慇懃な口調であった。

男は目を細めた。

「老人をいたぶっている破落戸共を見過ごしていくわけには参らぬな。わしが一緒に付き添ってやるゆえ、早く駕籠を担げ」

「付き添いって何だよ。何言ってんだこの野郎」

殴りかかってきた若い方の男が息杖を振り上げて殴りかかってきたが、男はなんなく体を交わしながら足をかける。体制を崩した駕籠かきは勢いよく転んだ。すぐさま立ち上がろうとしたようであるが、逆上していたためか足が絡まり、よろけるように崖の向こうへと転がり落ちた。

「うわぁー」

崖は急な斜面となっており、羊歯のような植物が覆い茂っている上を落ちていったらしい。一瞬の後にうめき声と助けを呼ぶような悲鳴が聞こえた。

「あのばかが……」

残された駕籠かきは、荒々しく舌打ちをした。男は駕籠かきを振り返る。

「助けに行ってもやなくてよいのか」

駕籠かきの男は息杖を地面に投げ捨て、駕籠の中で呆然としている老人と侍をそれぞれ短く見たあと、落ちた仲間を助けるために腰紐を持って崖の下へと向かった。

男は老人の元へ歩いて行く。

「こうなっては歩いて行くしかなさそうであるが、歩けますかな？」

どこかの商家の隠居といった風の老人は、這い出るように駕籠から出てきて言った。

「……助けていただき、ありがとうございます。こうなってはそうするよりありませんね」

一人でこんな山道に入るにはなにか訳がありそうであるが、男はそれについては何も言わぬまま苦笑した。

「峠の茶屋まで行けば、別の駕籠なり、馬なりを呼んでもらえるかもしれません。お供仕ろう」

老人は頷くと、男とともに歩き出した。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:44

総文字数 : 2699 字

獲得☆ 3.769

スラップスティック

大沢愛

目の前に薄暗い光景が広がる。全身が熱くなり、動悸が始まる。寝過ごした。あわててホームに降りる。うすら寒い夜風が襟首から忍び込む。ホームには乗客の姿がまばらに残っていた。ＪＲ高松駅、と表示された看板が天井から下がっている。

岡山での職場の歓送迎会は午後九時に終わった。退職するイワイさんとイイノさんの周りで連休の予定について話を合わせて、ボスのノヤマ課長の長広舌に頷いていた。見慣れない三人の新人が時折、見つからないつもりで嫌そうな顔でスマートフォンに目を遣っている。下らないことをしていると思っているのだろう。俺もそうだった。下らなさを感じられる立場ではなくなっていることに気づくのは三週間もあれば十分だ。同期のニイハラが例によって思い知らせるだろう。わざと笑顔で話しかけると相好を崩した。かすかな余裕を感じる、いつも通りの会だった。

お開きになって、駅に向かって足を速めながら電話した。
「今、終わった。電車に乗ったらワンコールするから早島駅に迎えに来てくれ。」
電話の向こうでノリコが、わかった、と答える。五歳年下で、もう二年の付き合いになる。市内の病院で医療事務をしている。今日はスポーツジムの予定もなく、アパートで過ごしているはずだった。
「車で行くね。ちょっと早島公園に行こうよ。夜桜がきれいだから。」

わかった、と答えておいた。そのころには酔いもいくぶんかは醒めているだろう。ノリコの要求に応えながらも、アパートに寄るだけの体力は回復しているはずだ。

岡山駅の階段を駆け上がり、改札を抜けた。ホームへの陸橋を渡って入線していたマリンライナーに乗った。車内は満席で、つり革も埋まっていた。ポールをんでノリコへのワンコールをして、目を瞑る。立ったままなら寝過ごすことはまずない。のしかかる身体の重みを腕に受けながら、発車のベルを確かに聞いていた。

それがなぜ、終点まで眠ってしまったのだろう。ＪＲ瀬戸大橋線はその名の通り瀬戸大橋を渡って岡山と香川をつないでいる。瀬戸内海を渡って隣県に着いてしまった。ホームの反対側には「岡山行」の表示のある車両が止まっている。足を引きずって乗り込む。生暖かい車内にはいくつか空席がある。その一つに腰を下ろし、コートの内側のガラケーを探る。着信が４件入っていた。迷った末に、メールを打つ。
〈ゴメン！寝過ごして今、高松。上りに乗った〉

送信して、窓に凭れる。後頭部が冷たい。ガラケーが振動する。

〈びっくりしたー。わかった、時刻調べて、早島にいるね〉

文字列を見た瞬間、力が抜けた。涙が出そうになった。週末の夜に車での送迎を頼まれても文句ひとつ言わないノリコが急に愛おしくなった。早島駅前で車を止めて、降りてこない俺を待ちながらどれだけ不安だったか。とんでもないひどいことをした。もし俺なら逆上して罵倒メールを送信後、とっとと帰宅しているだろう。九月の誕生日には指輪を贈ろう、そう決めた。暖かいものがこみ上げる中、ガラケーを胸のポケットに入れた。

そこまでは憶えている。

今、向かいの窓からは岡山駅のホームが見えていた。乗り込んでくる乗客はいない。このまま回送電車になるのだろう。コートの中でスーツが着崩れていた。立ち上がり、ホームに降りる。時刻は11時を回っていた。酔客の一団が目の前を通過する。また寝過ごしてしまった。耳の奥で鼓動が響く。見開いた目の表面が痛む。ホームの電光掲示板を見る。先発のマリンライナーは目の前だ。開いたドアから乗客が溢れそうになっている。迷わず突進して、煙草臭いトレンチコートと整髪料の臭気の中に割り込む。胸元のガラケーに手をやったものの、さすがにフケの浮いた見知らぬ男の耳元で電話はできない。せめてメールを、と思ったが、右手はポケットから取り出した角度のまま胸に押し付けられている。発車のベルが鳴った。右手の親指で発信履歴を呼び出し、最新をクリックする。コールサインが1回、鳴ったところで切った。察してほしい。無理な話だが察してほしい。ガラケーをポケットに落としたところでドアが閉まり、密集した乗客が大きく揺れた。額がパイプに押し当てられる。そのまま目を瞑った。15分ほどで着く。それまで額の痛みを意識し続ければいい。

なぜ、窓越しの駅名表示は高松駅なのだろう。なぜ、俺は四人掛けシートに横たわっているのだろう。通路には誰もいない。ホームに駆け下りても、鼻先に冷ややかな風が吹くだけだ。

――岡山行、最終電車です。

アナウンスが聞こえる。目の前のマリンライナーに駆け込む。空席に目もくれず、吊革を二つ握って歯を食いしばる。右上の親知らずが痛む。絶対に眠らない。何があっても。

〈今高松。ごめん。いくらでも罵倒してくれ〉

メールをする。そして目を見開いて車内掲示を睨み付ける。

うとうとしたことは認める。

――早島ー、早島ー。

車内放送を確かに聞いた。閉まりかけたドアから外に出る。背後で笛の音とともにマリンライナーが動き始めた。見慣れたホームが今夜は別物に見える。ひどく長く、そして明るく見えた。ベンチも心なしか色鮮やかだった。天井から下がった駅名表示を見る。

「児島」

改札を出た。ロータリーにはタクシーの姿もない。よろけながらバス停のところまで歩く。終バスはとっくの昔に出ていた。ノリコにはもう言い訳もできない。ベンチに倒れこむ。背中が痛い。ガラケーを取り出す。

〈今夜はごめん。もう帰って〉

手を放すとガラケーは舗面に落ちた。寝てばかりいたのに、全身が疲れ切っている。ここで寝て、風邪をひこうが熱を出そうが俺のせいだ。自業自得だ。馬鹿な俺には当然の報いだ。一人で凍えてしまえばいい。春の夜とはいっても冷え込むはずだ。そう思って目を閉じる。情けないことに眠気はすぐに押し寄せてきた。何もわからない。背中痛みが不意に遠ざかり、意識は闇の中に吸い込まれていった。

身体が揺すられる。こめかみが痛い。目を開けると、遠くに駅の照明が見えた。頬に触れる指先は暖かった。警察官か、それとも駅員か。親父狩りにしては丁寧だ、とぼんやり思う。

「起きた。よかった」

目の焦点が少しずつ合ってくる。信じられない顔がそこにあった。そこにいたのはノリコだった。背中に手を当てて、ゆっくりと起こす。

「早島のホームで、マリンライナーの車内を見たんだ。いなかった。メールの届いた時刻を見て、もしかしたら兎島かな、って。」

夜気は冷たかったけれど、ノリコの身体は暖かった。涙が出てきた。ノリコがこぶしで額を軽く叩く。目の下を指で拭いながら、ノリコは言った。

「お客さん、終点ですよ」

俺は、ちいさく頷いた。

(了)

投稿時刻 : 2014.04.05 23:41

最終更新 : 2014.04.05 23:45

総文字数 : 4354 字

獲得☆ 3.692

僕らの終点

晴海まどか

「お客さん、終点ですよ」

今さっき電車に乗り込んだばかりだというのに、アキホは僕の肩をつついてそう言った。ちょっと低めの声で、車掌さんの真似でもしているつもりなんだろうか。細くて丸い目がくりっと動くかわいらしいアキホに、それはまったくもって似合わない。

「終点はまだまだ先だよ」

アキホはじと目で僕を睨んだ。

「ほんっとに面白くないよね、ヨシって。もっと面白い返しができないわけ？」

「僕は大阪人じゃない」

「大阪人が全員芸人だと思ったら大間違いなんだから。人種差別もたいがいしろ」

千葉県生まれの千葉県育ちのくせに、アキホは知ったような顔でダメ出ししてくる。ヒドイ。とはいえ、アキホが僕に対してヒドくないことの方が珍しいので、もはやなんとも思わないけど。アキホに罵倒され続けてはや一年とちょっと。彼女の罵倒は、僕の生活におけるBGMみたいなものだ。

午後三時過ぎ。房総半島の下の方に向かう四両編成の車両は、かろうじて空席がないくらいの乗車率だった。僕らは閉まったばかりのドアに並んでもたれかかっている。アキホはお正月に買ってもらったという自慢の赤いエナメルのパーチを肩に斜めがけして、そこから取り出したオレンジ色ののど飴をおもむろに口に放った。

きんかんの甘酸っぱいような匂いが僕の方まで漂ってくる。

「それで？　なんで終点なの？」

「ヨシの人生が行き詰ってそうだから」

この世に生を受けて今年で十二年目。早くも僕の人生は行き詰っているそうです。

「どう行き詰っているのか、説明してもらえると嬉しいんだけど」

「そんな頼み方で人に教えてもらえと思ってんの？　まずは土下座して足をなめるところから始めなさい」

「悪いけど、僕、やれって言われたらそれくらいできるよ？」

車内にアナウンスが流れた。もうすぐ次の駅に到着する。

「それと、僕ものど飴ほしい」

「人にもものを頼むときは――」

電車ががくつと揺れて、バランスを崩したアキホは僕の肩に掴まった。アキホはこの一年で身長がぐぐつと伸びて、僕と同じか僕より少し高いくらいになった。男子の中でも背の順は前の方から数えた方が早い僕ではあったが、それは本当に残念だった。いつまで経っても、僕はアキホと対等になれない。

「セクハラ！」

アキホに肩をつかれた。自分から僕に掴まってきたくせに、ヒドい言い草である。

音を立てて、電車は次の駅に止まった。開いたドアから一歩離れて、僕らは二つ並んだ空席を見つけて腰

を下ろした。ほれ、とアキホが差し出してくれた手の中には、オレンジ色ののど飴の小袋。
アキホのこういうところが、僕は好きだ。

最寄駅で一駅分の乗車券を買って、当てもなく電車に乗って、飽きたら帰ってくる。そんな遊びが、今の僕らのブームである。

僕もアキホも、自分たちの街にいるのが嫌いだった。小学校というのは狭い世界である。同じ町内の子供たちが集められているというのがまずよくない。学校を出ても、誰かと遊ばなきゃいけない。誰かと遊んでなくても、道端で会うかもしれない。一人でいるとアイツはまた一人だって言われるかもしれないし、誘いを断ったのに町でばったり出くわしたら翌日からハブにされるかもしれない。面倒だ。ちなみに今のは、前者は僕の話で、後者はアキホの話だ。つまり、僕らは小学校というコミュニティにほとほとうんざりしていたわけである。

僕とアキホは、そういう部分の考え方がきわめて似ていた。少なくとも、僕は似ていると思っている。アキホもそう思っているかどうかはわからないけど、でも似たようなことを思っているからこそ僕と一緒にいる、はず。ちなみに、僕は去年通っていた英会話教室で仲良くなった。英会話教室は、二人そろって半年でやめたけど。

そんな僕らが、この狭っ苦しいコミュニティから抜け出すために考えたのが、この遊びである。お金はちょっとだけかかるけど、ペットボトルのジュースを一本買うのと同じくらいだと思えば大したことはない。空になったペットボトルに家で麦茶を詰めてくればいい。

週に一度か二度、僕はアキホと一緒に電車に乗る。狭っ苦しいコミュニティにおさらばだ。適当な話をして、車窓を流れる景色を見て、無為な時間を過ごす。
「この電車の終点って、どれくらい遠くにあるんだろう」

唐突な僕の言葉に、窓の外を見ていたアキホがこちらを振り返った。
「房総半島の端っこでしょ」

アキホはリアリストだ。
「それって、どれくらい遠い？ 三日くらいかかる？ 帰れなくなったりするかな」

僕とアキホの小さな旅は、いつも二時間くらいで終わっていた。一時間くらい電車に乗っていると、段々と不安になってどちらともなく、そろそろいいかな、って空気になって、引き返す。
「あんた、地図とか見たことないの？」

アキホは嬉々として僕をバカにする罵詈雑言を並べ立てた上で、数時間もあれば終点まで行けることを教えてくれた。

「終点まで行ったら、帰れなくなるかな」
「そんなことないよ。世界は狭いんだよ、意外と」
「じゃあ、行ってみようよ」

アキホはちらと車内を見回した。停車するたび、電車からは少しずつ人が下りていって、少しずつまた人が乗ってくる。でもなんとなく人は減っていている気がする。向かいのシートに座ったずっと眠っている中年のおじさん、車両の端っこを占領している女子高生のグループ、なんだか幸せそうに喋っているおじいちゃんとおばあちゃん。僕らがこの電車に乗って、三十分以上が経っていた。

いいよ、と少し強がるようにアキホは言った。
「じゃあ、目指すは終点ね」
「帰れなくなっても、僕はアキホと一緒にならかまわないからね」
僕は精一杯、アキホの不安をカバーするつもりで言ったのに。
「悪いけど、私はそれは勘弁」
つれない。

電車に乗って、一時間が過ぎた。窓から見える景色は緑が増えてきて、やがてそれは海の青に変わった。東京湾。落ち着いた濃いブルー。南国の海はどうしてあんなに明るくてテンションが上がる常夏ブルーなんだろう。東京湾は差別を受けてるんだろうか。

「終点までは、まだまだかな」
「まだまだだね」

アキホは携帯電話で地図を表示してくれた。僕らの乗っている電車の終点は、館山駅というらしい。房

総半島は意外と下に長くて、まだ僕はようやくその半分を過ぎたくらいの位置にいるらしい。

「ずいぶん、遠くまで来たね」

アキホは神妙な面持ちで頷いた。

「未知との遭遇に備えないといけないかもしれない」

アキホの言葉に僕も気を引き締める。僕は布製のトートバッグを持っていたのだけど、こんなことならランドセルを持ってくればよかったと思った。ランドセルの方が頑丈そうな感じがするし、武器とか詰めるにはぴったりに思えた。

僕は、ふと向かいのシートに目をやった。この車両にいた女子高生グループやおじいちゃんとおばあちゃんはどこかの駅で降りてしまってもういなくなっていて、顔見知りなのは眠り続けている中年のおじさんだけになっていた。くたびれた薄手のコートは前が空いていて、七福神の太った神様みたいなお腹が灰色のズボンに乗っていた。日焼けしたみたいに赤黒い顔色で、頭はつるつと禿げ上がっていて、口は半開きになっている。でもいびきは聞こえない。僕のお父さんはこのおじさんよりももう少しお腹は引っ込んでいたけど、夜中のいびきはひどいものだった。ちょっとはこのおじさんを見習ってほしいものである。

「あのおじさん、ずっと寝てるね」

いつの間にか、僕と同じようにアキホもおじさんを観察していたらしい。

「どこから来たのかな」とアキホに顔を覗き込まれて首を振った。

「僕が知ってるわけがないよ」

「ちょっとは面白いこと言えないわけ？」

「何を言っても、僕の答えじゃアキホはきっと満足しないよ」

「そうだね。でも、あんまり自分を卑下しない方がいいよ」

アキホはむき出しの膝の上に肘をついて、おじさんを凝視する。

「そんなに見たら、起きちゃうよ」

「視線で人は起きないわ」

そうだ、とアキホはいいことを思いついたみたいに言って、口元に笑みを浮かべた。

「どうかしたの？」

「今は教えない」

電車は加速と減速を繰り返す。もうすぐ、次の駅に着く。

途中から単線になったのか、上り方向の電車の待ち合わせのために駅に停車する時間が増えた。『単線』っていう言葉も、この遊びを始めるようになってアキホに教えてもらった。アキホは僕が知らないことをたくさん知っている。

段々と日が傾いてきて、夕方になったなあと思っていたら、あっという間に外は暗くなった。夜だ。午後五時半過ぎ。四月になって長かった冬が終わったと言っても、日が沈むのはまだ早かった。冬が春の足を引っ張っているみたいな感じがする。

僕らの目指す終点、館山駅が近づいてきた。車両はすっかりガラガラで、僕らと眠り続けるおじさん、ほか数人って感じになっていた。

車内アナウンスが流れたのを機に、アキホは立ち上がった。

「どうかしたの？」

「ずっとこれ、言ってみたかったんだよね」

アキホはためらうことなくおじさんに近づいた。そして、肉厚そうなおじさんの肩をぽんぽん、っと叩いた。

「お客さん、終点ですよ」

アキホが企んでいたのはこれか。っていうか、どんだけこの台詞が言いたかったんだろう。

アキホはにまにましておじさんが起きるのを待っていた。が、おじさんは動かない。

ちょっと焦れたように、アキホはおじさんの肩をゆする。

「お客さん、終点ですよ！」

次の瞬間。

音を立てて、おじさんの体が前のめりに倒れた。

おじさんは亡くなっていた。

終点の駅に着いて、同じ車両に乗っていたほかのお客さんが駅員さんと呼んでくれた。おじさんは目立ったケガもしていなかったし、心臓か何かの病気じゃないかと駆けつけた救急隊員の人が言っていたけど、詳しいことはわからなそうだった。

救急車に乗せられ、運ばれていくおじさんを僕とアキホは黙って見送った。

おじさんがいつ終点に到着したのか、僕らにはまったくわからなかった。

それから僕らは駅員さんに事情聴取されて、ちょっとだけ怒られて、家に電話をされて、僕らの町に向かう電車に乗せられた。僕らの駅に、僕とアキホのお母さんが迎えに来るらしい。どれくらい怒られるのか、想像しただけでげんなりである。

「帰りたくない」

ぼそっと呟いたアキホに僕も大賛成である。

しばらくして、アキホは僕の肩にもたれて眠ってしまった。窓外を流れる景色は夜の黒色ばかりで、森の緑も海の青ももうわからない。ただ、僕らの町に近づくにつれ、白々しい明かりが増えていくような気がした。

すぐそばにあるアキホの顔。その口元に、そっと僕は手を当てて、彼女が確かに呼吸をしていることを確認してちょっとだけ安心した。僕はアキホと一緒に終点に行って、戻ってきた。そのことがちょっとだけ誇らしい。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:28

総文字数 : 2228 字

獲得☆ 3.583

或いはそれが禍福という物の終着点だろうと 君は言わなかった

犬子蓮木

「お客さん、終点ですよ」

声をかけられて、はっと目を覚ました。仕事帰りの電車の中で、いつのまにか眠っていて降りる駅を過ぎてしまったのか。そんなまれによくある状況を想像したけれど、ねぼけた頭がはっきりししてくるにつけ見えてきた光景はどうも違うらしい。

僕はタクシーに乗っていた。

そして声をかけてきたのはタクシーの運転手だ。

ここはどこだろう。夜。街。街灯は夜に抵抗すれども暗さから逃れることはできず、時折、通る車がかろうじて世界を一瞬照らしていた。

「お客さん、終点ですよ」

運転手はまたそういった。

タクシーに終点なんてあるのだろうか。僕が告げた目的地、たとえば僕の家だとかあいつの家だとか、まあもしくはせいぜい会社であるとか、そんな場所に連れて行くのが仕事だろう。

「ここどこですか？」

僕がどこに行きたいと告げたのかは思い出せない。

「お客さん、終点ですよ」

運転手は相変わらずそう繰り返した。ただ今までと違ったのは、窓の外の看板を目でしめしたということだった。

―― 終点 ――

暗い世界にかろうじて浮かんでいる木製の看板にたしかに『終点』と書かれていた。大きなゴシック体で。

僕は不機嫌な運転手に、これ以上の不満をためないように、言われるがままの金額を支払ってタクシーから降りた。ほんとうならば「勝手にこんなところに連れてきて」という不満を浮かべるのだろうと思うのだけど、今は不思議とそんな気持ちにはならない。もしかしたらまだ寝ぼけているのかもしれない。フェードアウトするように暗闇に走り去ったタクシーからこの場所に残された僕は、運命に導かれた勇者によってはじめて殺されるためだけに生まれたかよわいモンスターのよう、わけもわからずに『終点』とい

う看板の前に立っていた。

なにかのお店だろうか。バーもしくは飲み屋のような。

看板の横にある重い金属の扉を開いた。

「あっ」

黒猫が僕の開けた隙間に忍び込むようにして建物の中へ入った。僕も遅れて黒猫に続く。中はすぐ地下への階段になっていた。階段は暗く長く、先陣を切って行った黒猫はもう見えない。ゆっくりとゆっくりと階段を降りていく。階段はやけに長く感じられた。もう三階分ぐらい下りているような。折り返すような構造でもなくひたすらまっすぐ地下へと潜っていくので、建物の地下を超えて、道を越え、さらに別の建物の地下へと進んでいるのではないかとすら思えた。

僕は酔っているのだろうか。

だからタクシーで眠ってしまった。

そしてこんなわけのわからない場所を歩いている。

どこに着くのだろう。

どれだけ進めば着くのだろう。

そんなことを考えて、ふと笑う。『終点』の終点が見えないなと。

それでもやはり不思議な気持ちで、帰ろうとか戻ろうという気持ちは少しもわいてこなかった。ひたすら『終点』を見てみたい。そんな気持ちばかりが僕の足を動かしていた。

一時間は経っただろうか。

僕の体は疲れ果て、だけど進みたい気持ちがあり、悲鳴のような不協和音を奏でていた。

あの黒猫もずっとこの階段を降りているのだろうか。

それともどこかで気付かないうちに追い抜いてしまったのだろうか。

『終点』への階段は暗く、端のほうで眠っていたならば気付かなかっただろうな、と思う。けれど、僕がそんなことを思ったのを見過ごしたかのように、黒猫が僕の前に現れた。

一声鳴き、顔を舐め、僕の足下へ。それから触ろうと伸ばした僕の手を交わして、来た道を引き返し、華麗なジャンプで階段をのぼっていった。

僕の伸ばした手は虚空を切った。

それは今、触れなかったことばかりではない。

ともに『終点』を目指していたと思っていた者が、何事もなかったかのように帰って行ったのだ。僕は宙で手持ちぶさたになった手を引き戻す。無意識に首元を掴み、僕自身の脈を感じた。

疲れ果てた足が気絶したように力を失い、膝から崩れ落ちる。バランスを逸した僕は階段を少し転がるように落ちていき、そして止まった。

階段が終わったのだ。

平たい地面が僕を受け止めてくれた。

転がった際に打ち付けた体から痛みを感じていたけれど、そんなことよりもあの長い階段が終わったことに僕は心からの感動を覚えていた。こんな達成感はいつ以来だろうか。仕事でこんな気持ちを味わったことはない。受験で目的の学校に受かったとき？ 否、受験だってそれほどではない。こんなうれしい気持ちはもしかするとはじめてではないだろうかと思えた。

僕は子供のように走りだした。

もうすぐ『終点』だ。

どんな世界が僕を待っていてくれるだろうか。

暗闇の奥に扉が見えた。

質素だけど、年期と雰囲気を感じるたたずまい。
足を止めて、スーツにこびりついた埃を払う。
取ってを握り、ドキドキしながら、扉をあけた。
カランカラン。
チャイムが鳴り響く。
僕の目にまぶしいばかりの光が飛び込んできた。
びっくりして目を瞑り、少しずつ慣れていき、まぶたの上からの白い光を受け入れて、ようやくと目を開いた。

―― 終点 ――

一畳ほどしかない行き止まりの部屋のまっしろな壁に『終点』の二文字が大きく黒いゴシック体で書かれている。僕は壁をなんどもさわる。僕はなにかしかけがあるのだろうと小さな部屋を探し回った。黒い『終点』の文字に指をはわせたり、しゃがみ込んで隙間を探したり、飛び上がって天井をさわったり。
けど何もなかった。
ただ『終点』の二文字が書かれただけの部屋だった。
ほんとうにただの『終点』だった。
それだけの……。
終わり。
終点。
零。
。

<了>

投稿時刻 : 2014.04.05 23:28

最終更新 : 2014.04.05 23:31

総文字数 : 2307 字

獲得☆ 3.583

春酔い

栗田柚香

真夏のように暑い春の夕暮れであった。余は同志たちと別れて市電に乗り、姉の宅へと急いでいた。予定では午後の早いうちに訪問するつもりであったのだが、つい同志たちとの議論に熱が入ってしまい、コーヒーも女給の眼差しも冷ややかになったところで見渡せば世間は夕飯時である。営々と主婦を営む相手にとってはすこぶる都合の悪い時間帯だが、余は構わずに義兄宅へ向かう路線を選んだ。呼びつけたのは向こうなのだから、請われて訪ねる側に遠慮呵責はいらぬという腹づもりだ。義兄はまだ帰らぬであろうから問題はない。それに、姉はよく出来た女だから、客人に夕膳の香りだけ嗅がせて追い返すことはできぬ。よって余は、姉孝行と本日の晚餐を一举両得で済ませる予感を空きっ腹に弾ませて、じわじわとまとわりついてくる陽気をまるで気にもかけず、懐手のまま座席にそっくりかえっておった。

それにしても最前の同志たちとの議論は一 T は南米大陸の少数民族について語りたがっていたし、K はこのところバロック音楽の基礎音律に凝っており、F が当面頭を悩ます問題は軍人皇帝時代のローマ法についてだ（ちなみに余は目下のところ、油絵の具と岩絵の具が持つ品格の差を検証中である）。そんな我々が、一つの議題に一致して同じ土俵に立ち、時間を忘れるほどの主張と論駁を重ねたということが、今もって信じられないように思われる。これぞ学問の醍醐味であり、先人の上に成り立つ我が世界を実感できる時だ。確かに我々は統一された結論を導くことはなかった。反論はさらなる反論を呼び、証拠を照査するためにあらたな議論が沸き起こった。筋道などどこにもなかった。だがそれが瑕疵となろうか？我々四人の過ごしたこの濃厚で緻密な時間を非難する輩が現れたら、我らは全員、団結して相手を糾弾することに異存はないだろう。議論は魂を洗い清め、議論は人との親睦を強め、議論は人間を全き心へと導く。正直なところ、余は今日一日でひと回りもふた回りも大きくなった気さえする！

車輪と線路の刻む規則正しいリズムに身を預け、胸の高揚を噛みしめる。そこでなにか、いつもと違う振動音に気づく。蠅の音のようである。社内に飛び込んだ運の悪い奴がいるのかと思ったが、見渡してもそんな影は見当たらない。音はどうやら車体から鳴っている。上から、下から、斜め前から、斜めしたから、総じてあらゆる思いもかけぬ場所から、小さなものがぶつかる音が聞こえてくる。いずれ止むと思っていたが、一向に止む気配もない。

電車が停車場に停まる。音は止む。電車が発車する。また音が鳴り始める。余の注意はすっかりその奇妙な雑音に吸い取られてしまう。よくよく注意していると、規則正しいはずの電車の振動音にも濁りがないだろうか？車輪が回るたびに、一定の間隔で不気味な揺れが起きてやしないだろうか？そう感じているのが余だけではない証拠に、他の乗客もチラチラと周囲に目をやり、不安げな表情を交わし合っている。うつむくのが習性の彼らなののである。

電車は次の停車場に停まった。余はここで車内点検が入るだろうと思った。が、電車は何事もなかったかのように、線路を滑りだしたのである。そしてまたあの雑音。余はしびれをきらして立ち上がり、スタスタと前方の車両へと向かった。車掌に車両の異常を伝えねばならん。今はまだ通常通りでも、この先の運行をさせちゃならんと言申し立てねばならん。生憎余の脳裏には、以前近場で起きた巨大な脱線事故のビジョンまでが浮かんでくる。自然足は速まる。気づけば額に脂汗まで浮かんでいる。まだ五月にもなっていないのに！余はさらに足を速め、先頭車両の扉に手をかけようとした。そのときである。電車が大きく傾いた。足を着けていた床が浮き上がった。何ものの支えにも身を預けていなかった余は、当然の結果として、大きく身体のバランスを崩した。そして何が起きたか分かる前に視界は暗転し、代わりに怒号のような騒音で世界は埋め尽くされた。

騒音に果てはない。音源も何もわからぬ、もはや余の耳のなかで鳴り響いているも同じである。すでに外耳はぴったりと両手で封じているのに、振動は空気の道をもって封鎖をこじあげ、中耳内耳へと不法なる侵略を断行し、脳蓋までの電撃作戦を敢行しておる。この物理法則という逆らえぬ帝国主義の結果として余の意識は消耗し、神経系は断裂の危機にさらされ、精神の中枢があと少しで破壊されることは明白である。そんなのはゴメンだ！余は叫んだ。いや、余の脳と精神が絶叫を欲した。そして肉体は本能の意に従った。金切り声、というものを最後にあげたのはいつであったか、ともかく余は今その記録を更新した、いやそんなことはどうでもいい、誰か助けてくれ、振り飛ばされる、落とされる、壊される、殺されるー

「お客さん、お客さん」

目を開けた。

頭上には、皺のたくさん刻まれた車掌の、人の良さそうな顔があった。
同時に飛び込んできた蛍光灯の明かりが眩しい。

「お客さん、どうしたんです」

車掌は笑い皺のたくさんできた顔を深刻そうに歪ませて、僕のことを覗きこんでいる。
気がつけば僕は、停止した電車の床に、大の字になって寝転がっているのだった。

「お客さん、終点ですよ。さあ、起きてください」

車掌さんに促されて、僕はゆっくりと立ち上がった。ホームは静まり返っていて人は見当たらない。電車

が停車してからすでに結構な時間がたったということだ。

そろそろと起き上がった僕に、車掌は白い手袋をはめた手であるものを差し出した。それはいつの間にかポケットから飛び出していた携帯電話だった。

僕は、口のなかでありがとうと言うのが精一杯だった。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:35

総文字数 : 1849 字

獲得☆ 3.583

《山手線ワンダーツアー賞》
ある男の盛り上がらない話
碓氷穰（元うわああ（ry）

大崎駅。切符を買う。列車に乗る。それだけの事。人が溢れるホームで列車が来るのを待ち、目の前で開いたドアから到着した列車に乗り込む。座席はどこもかしこも人が座っていて、私が座る余裕はなかった。つり革につかまりぼんやりと景色を眺める。そして列車は動き出す。私の体は慣性で後方に流されるが、つり革につかまってそれをこらえる。

品川駅。高層ビルが立ち並ぶ。私は流れて行く。ビルの姿を眺めている。

田町駅。若い学生らしき集団が電車内に乗り込んできた。東京タワーはうまく見えない。

浜松町駅。黒いスーツのサラリーマンが乗り込んできた。

新橋駅。再びサラリーマンが出たり入ったり。

有楽町駅。若いカップルが乗ったり下りたり。心なしか黒いスーツの人間は減り。顔に髭を生やした人物が増えたような気がする。

東京駅。旅行客だろうか、大きなカバンをしょっている。それから外国人の姿も見えたような気がした。多くの人数が入れ替わったので、隙を見て私は座席に腰かけることができた。

神田駅。人間観察はやめた。それよりも私はある一つの悩みを、頭から振り払えないでいた。それはとても重たく、苦しく。人の心を蝕んでいきさえ擦る

秋葉原駅。その悩みは、おそらく小説が書けないということである。先ほどまで部屋に籠っていたのだが、結局私は部屋を抜け出し、こんな意味もない時間つぶしに興じている。

御徒町駅。何故書けないのだろう。それは私の才能が原因なのだろうか。いや、そんなことはないはずだ。きっと書けるはずだ。現に私は何本か小説を仕上げた経験がある。だからかけるはずだ。アイデア。そう。何かアイデアがあればきっと。

上野駅。だがアイデアは浮かばなかった。駅から駅までの間考え込んだというのに。何も。これっぽっちも。私は自らの発想の貧困さを呪おうとさえした。だが、そんなことをしても無意味だと私は気づいている。だから考えるべきだ。しかし何故考えられない？

鶯谷駅。もう考えたくない。

日暮里駅。 お

西日暮里駅。そ

田端駅。　　ら
駒込駅。　　く
巣鴨駅。　　私
大塚駅。　　は
池袋駅。　　寝
目白駅。　　ていた。

高田馬場駅。目が覚めた。相変わらず私は電車のシートに腰かけている。発車のサイレンがホームに響きわたっている。車掌の声が社内に拡がった。「ダあシャアリヤス」

新大久保駅。「ダあシャアリヤス」

新宿駅。　「ダあシャアリヤス」

代々木駅。「ドア閉まりますー」

原宿駅。　「ドアが、閉まります。ご注意ください」

渋谷駅。　「ダあシャアリヤス」

目黒駅。　「ダあシャアリヤス」

五反田駅。「ダあシャアリヤス」

大崎駅。「ダあーシャーリヤス」

そして再び。

品川

田町

浜松町

新橋

有楽町

東京

神田

秋葉原

御徒町

上野

鶯谷

日暮里

西日暮里「ダあシャアリヤス」

田端

駒込

巣鴨

大塚

池袋

目白

高田馬場

新大久保

新宿

代々木

原宿

渋谷

目黒

五反田

大崎・・・・

再度、品川田町浜松町新橋有楽町東京神田秋葉原御徒町上野鶯谷日暮里西日暮里田端駒込巣鴨大塚池袋目白高田馬場新大久保新宿代々木原宿渋谷目黒五反田大崎・・・・

長い。こんなに駅名覚えられない。私はそう思った。頭の中で考えているとほとんど何かの呪詛の様である。この大崎から五反田までのループは人を惹きつける魔力がある。いや、実際はそんなことないんだけど、この堂々巡りな感覚がまさに自分の人生の様である。

そして意外と長かった。何時しかあたりは暗くなり、ビルの明かりがまぶしくなった。数えきれないほどの人とすれ違った。そしてその誰の事も覚えていない。

時刻は夜の1:15分。「終点の大崎です」そうアナウンスがなった。それでも私は動かなかった。そうしていれば当然に駅員さんにこう言われるだろう。

「お客さん。終点ですよ」・・・・。

予想通りだった。最後に「降りないんですか？」と付け足して言われたがこれはこれでありだろう。まあそれで当然だろう。たぶんそれが因果関係だろう。

仕方ないので私は電車を降りた。やはりホームの人影はまばらだったが、それでも人がいるのが驚きだ。この山手線のループがまるで人生みたいなんて哲学的なことも考えたりするけど、物事の終わりというのは案外些末で、現実的なものなのかもしれない。劇的な終わりなんてのはあまりないよ。

なんだか山手線の最後の一周は一周しないものがあると聞いていたが今回は一周してきてしまった。それも人生観に結び付けようとしたけどそれもなんだか無理っぽい。

だからこの話もそろそろここで切り上げます。なんだか訳が分からなくなってきたし。

それでは本日はこの辺で。後には疲れた男が残されたとき。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:18

最終更新 : 2014.04.05 23:18

総文字数 : 1064 字

獲得☆ 3.500

お迎え

◆ BNSK.80yf2

一人、また一人と降りていく。
ボタンも押していないのに、だ。
自分がバスに乗っている、ということは分かる。
でも、どこへ行こうとしているのかが分からない。
そもそも、アナウンスが流れないから、一体どこの停留所なのかも分からないのだ。
景色は都会を離れ、小川のせせらぎが耳をくすぐる田舎道へと差し掛かっていた。
懐かしい場所だ、と根拠もなく思う。
先程まで、隣には妹が座っていた。私の手をきゅっと握って微笑むと、振り向かずに降りて行ったのを覚えている。
年老いた後姿ははっきりと目に焼き付いている。
けれど、どうしたことだ？ 私にはもう彼女の顔が思い出せなかった。
今降りて行った子供、あれは私の孫だ。最後に会ったのはいつだったろう？
確か、私が病院のベッドで寝ている時だったはずだ。
いや、バスの中で一緒だったのだから、ついさっきか。
分からない。夢の中のように意識がはっきりとしない。
二つ前の席に、仲良さそうに寄り添って座っているのは、息子夫婦だ。
私の視線に気付くと、笑顔で手を振った後、やはり降りて行った。
何時の間にやら、バスの中は私一人になっている。
窓の外にも霧がかかって、いよいよどこを走っているのか分からなくなりつつある。
私は怖い。
手すりにつかまって席を立つと、転ばないようによたよたと歩を進める。
運転席までのほんの数メートルが、やけに遠く感じる。
その時だった。
甲高いブザーと共に、再びバスが止まる。
私が降りる番が来たのだろうか？ と不安になる。
しかし、開いたのは後ろの降車扉ではなく、前の乗車扉だった。

見覚えのある顔が運転席に向かって一度頭を下げると、私の元へ静かに歩いてくる。

妻だ。

もう、何年になるだろう？ 君と離ればなれになってから。

私は少し涙ぐみながら、妻の手をとった。妻は少しはにかんだあとで、僕を最後尾の座席へと誘う。

私達が席に着くのを待って、再びバスは走り出す。

「元気だったかい？」

私の問いかけに、妻はそっとで頷いた。

「そうか、それは良かった。君がいなくなってから、寂しくてね」

昔なら言えなかった言葉も、今なら素直に言える。そう感じた。

私は妻に、息子が結婚したこと、孫が生まれたこと、息子夫婦と一緒に幸せな時間を過ごしたことを語った。

妻は時々相槌を打ちながら、私の話を聞いていた。

一しきり私が話し終わると、妻は私の手を取り席を立つ。

バスは止まり、初めてのアナウンスが流れた。

『お客さん、終点ですよ』

私は妻と頷き合い、降車扉へと向かう。

『足元にお気を付けて。またお会いしましょう』

私たちは運転席に向かって深く頭を下げ、バスを降りて行った。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:44

総文字数 : 953 字

獲得☆ 3.286

終点と最初の作品について

太友 豪

お客さん、終点ですよ。

頭の奥から声がする。

わたしは第五才能人格。クライアントを支援するために、顧客の頭脳の中に住み着いていた。

才能人工をコントロールするための統合人格は、人格と言いつつも実に機械的に仕事を進める。クライアントの多くは統合人格は、脳内にインストールされているものと思い込んでいる。けれども本当のところは、統合人格はクラウドコンピューティングシステムの中にある。

統合人格を、才能人格を必要とする人々の匿名データを収集し、社会をより安定した形に保つために支援する。

わたしは、第五人格。怒りの感情から惹起される攻撃性をコントロールする能力に長けた才能人格だ。

第一から第七までそれぞれの才能人格は、強い感情から引き起こされる社会的に望ましくないと言われる反応を抑制する任務を負っている。

感情そのものを才能人格にコントロールすることは、技術的には可能になっている。けれどもその行為自体は現代社会においては非人道的とされている。

大昔は薬物によって脳内物質の発生源や受容体をいじっていた。それと比べれば、ある種のストレス体制が高い人々をモデルに設計された才能人格によって衝動をコントロールすることはクライアントの生活向上に大きく貢献する。

お客さん、終点ですよ。

けれどもわたしの役目は、これで終了、ということらしい。

才能人格が消去される条件は、三つある。医師による判断、統合人格の判断、クライアント自身の要望、三つの条件のうち、二つが重なれば才能人格は溶けていく。

今回わたしは、クライアントの要望および、統合人格の緊急避難判断によって溶解が決定された。

わたしはわたしのクライアントを守るため溶解することに是非もない。

苦しみを感じにくいように設計されたことに感謝しつつ、わたしは溶けた。

私は覆い被さろうとする男を押しつけようとして、動けない。

俺は第五反転才能人格。

憤怒の代行者。

汗とも油ともつかない、汚らしい液体でぬめる男の首を締め上げる。

細い女の指は、ちょうど紐のようにいこの気管を潰す。

赤黒い汚らしいボールのようになった男の顔を強引に引き剥がす。

台所から、万能包丁を取り出す。

クライアントからフルーツカービングの知識をロードする。

第五反転才能人格、最初で最後の芸術作品を取り掛かろう。

お客さん、終点ですよ。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:19

最終更新 : 2014.04.05 23:24

総文字数 : 2074 字

獲得☆ 3.267

《来月ぽい杯もまた来てくれるかな！賞》
ワンマン電車、居眠り経由初恋行き
碧

春！

春である。

このところ、学校の授業時間が増えたり、バドミントン部でレギュラーになったりで疲労が溜まっているのに加えて、この陽気な心地のせいで、高校二年生の山本優子は、学校帰りの電車の中で居眠りをしてしまうことが多い。隣に友達がいれば、お喋りをしている間は覚醒していられるが、彼女は終点の駅で降りなければならないので、最後はいつも一人になってしまうのだった。

今週はここ最近の中でも特に辛い週だった。月曜日から電車に揺られるうちに眠りこけてしまい、「お客さん、終点ですよ」と肩を揺さぶられてしまった。気の弱そうな中年の運転士さんだった。悪気はないのだろうが見知らぬ人に体を触られるのが好きではないので正直なところ若干不愉快な気持ちになって電車を降りた。金曜日の今日はもう疲労がMAXである。学校前の駅を出発して、4駅ほど過ぎると、同じ駅から乗った同級生らは殆ど降りてしまい、一車両のワンマン電車は閑散とする。車両前方の方の席が空いて、思わず座りそうになったが、そこで一度立ち止まった。座ったらまた寝てしまいそうだ。でもこれからあと6駅も立ち続けるのは辛い。体が悲鳴をあげている。

そのとき、山本優子はちらりと運転席の方のミラーに目がいった。運転士さんが客席の様子を見るためのものなのだろうが、こちらからも運転士さんの顔が見える。

——ワーオ、若くてイケメン！

この際彼になら肩を揺さぶられてしまってもいい。あわよくばそこから恋に発展したい。仲良しの部活仲間の田中景子は、自分と違い4月になっても補欠のままだったが、変わりに隣の高校のイケメン彼氏をゲットして、毎日のろけているのを思い出した。疲れた女子高生と通学に使う運転士の恋とかロマンチックじゃね？

優子はなんとなくニヤニヤしながら前方のシートに腰掛けた。電車は規則正しくガタンゴットン揺れている。すぐに睡魔はやってきた。

「……くさん、お客さん、起きて」

優子は朦朧とした意識の中で、聞き覚えのあるような気がする声に呼ばれていた。

「う～ん……」

そんなに寝ていないはずなのに、頭が痛い。中途半端に外で仮眠をすると疲労感が増すことがある気がする。

そんなことを思いながら目を開けると、目の前に長身の男が立っていた。

いや、よく見たら男じゃなかった。

「やだ～、お客さん、もう終点～！　どんだけえ～！！！！」

「い、いっこーさん！！」

優子は思わず叫んだ。テレビで見ない日はないほどの人気タレントが目の前にいた。電車の運転士のコスプレをしているが、動きはくねくねだ。

「そして、肌荒れ～、おごと～！」

「う、うるさい、疲れてるのよっ！」

思わず叫んでから、自分の声の大きさにびっくりしてビクンッと体が震えた。目をこすると目の前には誰もいなかった。夢か。あたりを見回すと、座ったばかりのときはシートの三分の一は埋まっていた気がしたのに、もう両手で数えられるぐらいしか人がいない。電車の中で寝言を叫んだ優子に皆無関心な様子でスマホをいじったりしている。気恥ずかしい気持ちで鞆を抱きかかえ、優子は体を縮こませた。だがすぐに第二の睡魔の波が襲ってきた。この際熟睡してしまおう、次の駅まで4駅だからすぐにつくだろう……

「お客さん、お客さん……こんにちは！　今日もいい天気ですね！」

今度は確実に男性の声だ。少し歳を食った声にも聞こえるが、これがあのイケメン運転士さんの声なのだろうか。

そう思って目を開けると、目の前にいたのは、小柄で、サングラスをかけスーツを着た壮年の男性だった。

「それではまた明日も乗ってくれるかな？」

「い、いいともっ？！」

再び目が覚めると、乗客はさらに減って、片手で数えられるぐらいになっていた。後方の座席に座っている、同じ学校の制服の少女と目が会った。後輩だろうか。ニヤニヤ笑っている顔がそこ意地悪そうだ。不愉快になりながらも、次の睡魔が襲ってきた。だめだ、もう寝ない方がいい、頑張れ自分、あと二駅……

「お客さん、終点ですよ」

優しげな、洪い感じの、大人の男の声が聞こえてきた。朦朧とした意識で、優子は、誰の声だったっけと思いをめぐらせる。聞き覚えがある、確かに、でもこの前起こしてくれた運転士さんのとは明らかに違う――

「ほら、起きて」

促されて、優子は目をこすりながら開けた。

「か、蟹江敬三！」

「早く起きないと連れていっちゃうよ」

「じゃえじゃえ！」

驚きで意識が一気にクリアになると同時、社内アナウンスが聞こえてきた。

『次は花沢温泉駅、花沢温泉駅、終点でございます、お忘れ物のないよう――』

気付けば乗客は自分ひとりしかいなかった。電車の外はすっかり暗くなっていて、見慣れた山間の風景だがどこかうら寂しく不気味だ。そういえば昔世にも奇妙な物語で、いつもの電車に乗ってるはずが冥府

行きだったみたいな話があったなあ。蟹江敬三はもはやどこにもいなかった。

「終点です」

運転士の若干チャラボイスぽい地声が社内に響くと同時、プシューという音がして前方の扉が開いた。鞆から定期券を取り出し優子は立ち上がる。帰ったら風呂に入ってすぐ寝よう。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:11

最終更新 : 2014.04.05 23:40

総文字数 : 338 字

獲得☆ 2.857

二日酔い

小伏史央

「お客さん、終点ですよ」

そう言われても困る。わたしは寝ているのだ。

「お客さん。お客さん？ 起きてください」

ぐーすかぴー。

ところでわたしは死んでいる。わたしを見下ろすわたしが言った。ぐーすかぴーひゃらぱっぱらぱー。

「終点ですよ」ぱっぱらぱー。「降ろしちゃいますよ」ぴっぴっぴ。

わたしは降りる。わたしもわたしに着いて電車から降りた。空が暗かった。でもぴっかぴっかと妙に輝いていた。きらきらきら。ああこれは天国だ。わたしを迎えに来たに違いない。ぱっぱらぱー。

がしゃーん。がしゃがしゃ。わたしはそのまま家に帰った。そのころにはわたしとわたしはひとつの体に収束していた。ああ、なんだったのだろう。わたしがわたしを見下ろしていた。

きっとこれはなにかの前兆だ。明日、なにかが起こるに違いない。

投稿時刻 : 2014.04.05 23:35

最終更新 : 2014.04.10 02:57

総文字数 : 2785 字

獲得☆ 3.250

※制限時間後に編集

爆睡都市

工藤伸一@ワサラー団

目が覚めたら電車の中だった。既に停車している。しこたま吞んで爆睡していたのだ。しばらく座ったまま呆けていると、発車する気配がない。どうやら終電のようだ。でも何か変な感じがする。空気が違うというか。まあ酔っ払いだし、おそらく変なのは自分の感覚の方だろう。

意識が回復してきたところで車内を見まわしてみると、まだ大勢の乗客が残っている。事故で停まっているのかもしれない。隣の人に訊こうとしたら、眠りこけている。反対側の人も同じだ。とりあえず席を立ち車外にでようとしたら、何かにつまづいて転んでしまった。

何が落ちていたのか確認してみると、床の上には座れなかった人たちが倒れ込んで眠っている。これは尋常じゃない。踏まないように気を付けながら運転室に向かう。運転手も眠っている。何てことだ。しかし事故らなかったのは停車後に眠りだしたせいだろうか。

※

「運転手さん、終点ですよ」と全身を揺り動かしてみたら、彼は何とか目を覚ました。あくびをしながら「おはようございます」と返してきたので、まだ寝ぼけているようだ。「呑気なことを言ってる場合じゃない。ここ運転席ですよ」「本当だ。でも電車が止まっていて良かった。そういや終点だ」「電車を止めてから眠ったんですか？」「さあね？」「とにかく他の乗客を起こして下さい」「言われなくてもやります」「眠ってたくせに偉そうな」

※

「お客さん、終点ですよ」「僕に言ってどうするんですか」「失敬。これも仕事ですから」そう言いながらまた眠ってしまった。再び起こそうと思ったが、態度も悪く役に立ちそうにないから、他を当てることにしよう。

車外に出てみると、更に異様な光景が広がっていた。ホームには大勢の人々が突っ伏して眠っている。鉄道員たちも例外ではない。駅に何かが起きている。これは非常事態だ。睡眠ガスによるテロの類だろうか。このままでは僕もまた眠ってしまいそうだ。

焦りを感じつつ改札を出ると、外も同じだった。駅前の交番に立ち寄ってみたが、出勤中で誰もいない。電車の出入り口は停車時に開いていたからホームなど外も全滅だったが、自動車ならガスの被害を免れた可能性がある。そう考え車道に目をやると、所々から炎が立ち昇っている。

クルマが事故りまくっているのだ。並んでいるタクシーを窓越しに覗いてみると運転手も眠っている。窓を閉めていても駄目だったらしい。居眠り運転のクルマが一斉に衝突したのだろう。

※

街全体がテロにあったのだとすれば、一般人の力ではどうしようもない。110番にかけるしかないと考え、ポケットにしまったはずのケータイを探したが見つからない。泥酔していたから落としたのか、それとも寝ているうちにスリにあったのか。困り果てていると事故車の群れの中にパトカーを見つけた。

窓を叩いてみたが反応がない。近くにあったポールを引き抜いて窓ガラスを割り、そこから手を入れて鍵を開けた。そして直に起こそうとしたが、警官の寝息がない。寝ているのではなく死んでいるのだ。まあ交通事故だから仕方ないよな。

そんなこと言ってる場合じゃない。僕が目を覚ましたのなら、他にも起こせる者がいるかもしれない。そこで誰彼かまわず試してみたが、上手くいかない。そうこうしているうちにまた睡魔が襲ってきた。

※

「お客さん、終点ですよ」そう声をかけられて目を覚ました。ぼんやりしたまま記憶を辿り「酷い夢を視たものだ」と安堵するも、その安息は悪夢と何ら変わらぬ光景によって即座に打ち消された。街中で覚醒している者は他に誰一人なく、居眠り運転に起因する交通事故の多発で車道は焦土と化している。

のみならず多くの建物が燃えているのは、火器の不始末によるものだろう。深夜とはいえ、都心から長距離帰宅してきた住人の就寝時刻には、まだ早い。彼らを相手にする飲食店の厨房が火元となり、それが燃え移ったのだろう。まるで大空襲を受けた後のようだ。もはや何をすればいいのかすら分からない。それにしてもどうして自分だけ起きているのか。ようやく不可解な点に気づいた。

※

「お客さん、終点ですよ」と言ったのは誰か。そもそも電車の中で一人だけ目覚めた時にも、それと同じ言葉を聞いた気がする。しかし運転手は運転室で眠っていたし、自分が座っていたのは座席の真ん中だったから、ホームにいた鉄道員とも考えにくい。とにかく今は声の持ち主を探すしかない。とはいえ何の手が

かりもない状況では動きようがない。方法を考えあぐねている内、再び眠りに落ちていった。

※

「お客さん、終点ですよ」そう声をかけられて目を覚ました。いつの間にか電車の中にいる。しかも普段と何の変わりもない普通の車内だ。長い夢を視ていただけだったんだな。泥酔していたせいだろう。仕事が絶不調なもので、ストレスが溜まっていて。クビを免れるためにも、せめて明日も早く出社しないといけないのに。

※

「お客さん、終点ですよ」そう声をかけられて目を覚ました。すると今度は焦土の中だ。夢を現実と混同していただけだった。でも本当にそうなのだろうか。頬をつねって確認してみると、全く痛くない。古典的な手法ではあるが、信じるよりないだろう。多分まだ夢の中なのだ。

いつの間にか体が浮上していることに気づいた。飛ぶ夢は久しぶりなので嬉しくなってきた。しかし意思の自由は効かず、高度ばかり上がっていく。こんなのは初めてだ。どんどん街が遠のいて、日本列島や地球も越えて、見知らぬ場所で止まった。誰か近づいて来る。

※

「お客さん、終点ですよ」そう声をかけられて目を覚ました。と思いきや、今度は起きたままだ。どういうカラクリだろうか。そこで気が付いた。この声は何度も聞かされ続けてきたものに間違いない。駅前の惨状を思い出して怖くなった。普通の人間ではあるまい。正体を探ろうと顔を見たら、自分にソックリで驚いた。

「ドッペルゲンガーですよ」「聞いたことがある。会うと死ぬとか」「正確には死ぬと会えるんだけどね。いわゆる死神さ」つまり「人生の終点」という意味だったのか。それにしても繰り返し聞かされていたのが、まさか自分の声だったとは。そういや録音すると違って聞こえたりするもんな。

※

周囲はボンヤリしていて、もう一人の自分以外には何も見えない。「ここは天国、それとも地獄？」「さあね？」はぐらかされて嫌な気分になったが、相手も自分なので怒るのも気が引ける。それから何の変化もないので、暇つぶしに世間話でもしてみると、非常に馬が合って楽しい。自分同士だから当然か。

そしてそのまま今に至る。こんなことでいいのか悩ましいけれど、生前のストレスは跡形もなく消え失せていた。それに自問自答から繰り出される発想は、自分自身からすれば面白いものばかりだ。ただそれのみと戯れる時間が無限に続く心地よさ。案外これは天国なのかもしれない。(了)

投稿時刻 : 2014.04.05 23:56

総文字数 : 1494 字

獲得☆ 3.000

※制限時間後に投稿

夜間歩行

味の外

どこまで来たのだろうか。

自分の知っている駅は、とうに通り過ぎている。

どこの駅に向かっているのかわからない。外の風景から判断しようにも、周りは街灯の明るさひとつなく、夜の闇がただただ拡がっていて、どこにいるのかすらはっきりとわからない。

ガタリ、と電車の強い揺れと共に、乗っていた車両が突然暗くなった。前の車両も。電気系統のトラブルだろうか。

明るい車両を求め、後ろの車両へと移動した。車両間のドアが抵抗なく開いて私を迎え入れた。

また強く揺れた。この車両も照明が落ちた。もうひとつ後ろへ。揺れた。暗転。後ろへ。

疲労が溜まった体で空いている席に座ると、強い眠りの感覚に抗えなかった。重くなる目蓋と体を感じる。

「お客さん、終点ですよ」

急に上から声がして、私は首を伸ばした。車掌が苦笑いを浮かべながら、私に告げる。

「ここ、終点です」

知らぬ間に前の車両の照明は直っていた。私は何両の車両を歩いてきたのか。うまく思い出せなかった。

電車を出て、駅のホームに立った。降りる乗客は私一人しかいなかった。こんな線、あったのだろうか。やはりうまく思い出せなかった。

戻りの電車を待とう。きっと私の知っている、私の降りる駅にまで連れて行ってくれる電車を。そう考え、反対側のホームまで歩いた。

始発駅となる、先ほどまでの終点で電車を待っていた。戻りの電車が来る方をじっと見やっていた。ふいに、この先の線路がどこまで行くのか、そんなことが気になった。

いい齡して何をやっているのか。まるで馬鹿な学生みたいだ。自嘲しながらもホームから線路に降りた。線路の向こうへと、歩いた。

漆黒の中をひたすら歩いていて、玉のような汗が顔中に吹き出て、それを夜が冷やしていく。息が切れそうになる。ネクタイはとうに捨てていた。汗を拭くために持っておくんだったか。いつ捨てた？ うまく思い出せなかった。

はあはあと疲労と闘いながら歩いていると、突然、目の前に眩しい光と、耳障りな轟音がなった。電車だ。対向の線路にまで足をもつれさせつつも急いだ。反対側まで移動して、フェンスに背もたれ、うるさい電車が過ぎ去るのを間近に感じていた。最後の車両が過ぎるとき、線路の敷石がひとつ、私をめがけて跳ねた。当たる――そう思ったが、肩の上をかすめてフェンスとぶつかった。ガシャンという音が、停止する電車の音のように耳の中に響く。

「お客さん、終点ですよ」

さっきの車掌の台詞が蘇った。実は周りの闇に溶け込み、そう話しかけているのかもしれない。とにか

くうるさい。線路の先へ行く。

「ここ、終点です」

だまれ。確かに疲れている。だがまだ足は動く。もたれたフェンスから背中を引き剥がし、まだ見ぬ向こうへと足を運ばせる。

「終点だって」

「終点」

「ここから先なんてないんだからさ」

わかった。だまらなくていい。好きに言うといい。足の運びは止めない。

耳がふさげないというのは、中々難儀するものだな。うるさいのばかりが聞こえてしょうがない。

「振り返って駅を見ろ」

「戻ればだまるぞ」

「あの駅で電車を待つといい」

「始発駅」

声がずっと離れない。あらゆる方向から、男の声、女の声、子どもの声、老人の声で私に投げられた。あの駅？ 電車？ 始発駅？ 何のことだ？ うまく思い出せなかった。

いつしか線路は途絶えていた。いつから線路でなくなったのか、どうでもいいことのように思えた。耳の中ではワンワンと鳴り響く無数の声が思考を妨げようとした。すでに声に対する興味は失せ切っている。この先にしか進まない。

どこまで来たのだろうか。

自分の知っている駅は、とうに過ぎている。

知らない闇の中を一人歩いて、どこまでも。振り返らずに。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2014.04.06 00:26

総文字数 : 907 字

獲得☆ 3.462

※制限時間後に投稿

四角い切符

三和すい

遅くなったので、帰りは彼の車で送ってもらった。

彼とのドライブは以前は楽しいものだった。短い時間でもいろいろな話をして笑ったりした。

でも、今夜は私も彼も無言のまま。私が座っているのも助手席ではなく後部座席だ。

原因はハッキリしている。

私と彼の結婚を、どちらの両親からも反対されているからだ。半年以上前から説得しようと努力しているが、状況はまるでかわらない。

そのことに、私も、彼も、疲れていた。

二人で会っても、どうしてもお互いの両親の話になり楽しめない。ケンカも増えた。笑って「ごめんね」と謝ることすらできなくなった。

そして今夜、

「俺たち、どうしようか」

そんな言葉が彼の口からこぼれた。

つまり、このまま結婚せずに付き合うか。

それとも、別れるか。

返事ができないまま終電の時間が過ぎ、私は彼の車に乗せられて自分の家に向かっている。

彼は何も言わない。

私も何も言えない。

何も考えたくなくて窓の外ばかり見ていたけれど、車は止まらない。

見慣れた町並みが近づいてくる。

やがて車が止まった。私の家が少し先に見える。歩けば数分の距離。雨も降っていない。

だけど、私は彼の車から降りたくなかった。

降りてしまうと、すべてが終わってしまうような気がした。

なかなか降りない私に「お客さん、終点ですよ」と、彼が冗談っぽく言う。

けれど、私は笑えない。首を何度も横に振る。

「イヤよ。このまま乗ってる」

「終点って言っただろう」

「終電じゃないんでしょ？ だったら、また出発するわよね？ それまで乗ってる」

「……追加料金が必要だぞ」

「じゃあ代金は私自身で」

私の子供じみた答えに、彼が大きくため息をつく。

嫌われたかと心配になった時、

「手、出して」

素っ気ない彼の言葉に恐る恐る手を出すと、

「はい、切符」

四角い小さな箱が私の手のひらに寄せられた。やけに立派なその箱の中に何が入っているのか、見なくてもすぐにわかった。

信じられない気持ちで顔を上げると、彼が真剣な表情で言った。

「ここからの道のりは険しいが、それでもいいか？」

「あなたは？」

「お前が側にいてくれるなら頑張れる。お前は？」

「あなたが一緒なら大丈夫」

「それなら出発だ！」

私を乗せたまま、彼は車のエンジンをかけた。

投稿時刻 : 2014.04.12 02:04

総文字数 : 19 字

獲得☆ 1.500

※制限時間後に投稿、お題不足

ボカロ

姫翠@ワサラー団 (vip 店長&9

VOCALOID 性転換派生キャラクター

関連作品のご紹介

お題の「お客さん、終点ですよ」を取り入れた Twitter 小説を書いてくださった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。ぜひこちらの作品もあわせてお楽しみください。

てきすとぼい杯のお題で **Twitter** 小説 - 2014

<http://togetter.com/li/654769>

※他にも関連作品がございましたらリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

終わりに

第16回てきすとぼい杯、お楽しみいただきましたでしょうか。

今回は「お客さん、終点ですよ」を執筆のお題とさせていただきましたが、やはり電車・駅を舞台とした作品、また人生や物事の終結、転換点を想起させる作品が多かったように思います。

その傾向に逆らうように、鍵となる「終点」の語の意外な使われ方、異世界ファンタジーや時代小説など、お題の一般的なイメージを裏切ってくれる作品がしっかり登場するのも、てきすとぼい杯らしい所ではないかと思いますが、いかがでしたでしょうか。

今回はタイミング的に、年度始めの4月初旬でもあり、テレビ番組の大改編期・某有名長寿番組の放送終了などと重なったこともあってか、時事ネタが盛り込まれた作品が複数登場するなど、即興小説らしさも現れた回になったように思いました。

最後になりますが、今回も、1時間の即興とは思えない充実した作品をお寄せくださった作者の皆さま、投票・感想・チャット会にご参加くださった皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

てきすとぼい杯、次回はゴールデンウィーク開催！

昨年夏以来の、執筆期間を拡張しての特別回となります。連休中にご予定もあるかとは思いますが、お時間ございましたら、ぜひお気軽にご参加くださいませ。

2014年4月29日
てきすとぼい杯 運営担当

※次回てきすとぼい杯は、2014年5月3日(土)～6日(火)開催です！



作品集電子書籍をPubooにて頒布中。

言葉の茂る 樹が育つ。



てきすとぽいは、競作や共作を支援する
テキスト創作サイトです。定期開催や、
利用者主催の競作イベントが、日常的に
開催されています。

感想やアドバイスを、採点などを通じて、
作家同士が言葉を交わしあい、言葉の
やりとりが豊かに茂り広がっていく。そんな
サイトにあなたも参加して、一緒に創って
いきませんか？

いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集
〈第16回〉

<http://p.booklog.jp/book/85356>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85356>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85356>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ